

〈研究ノート〉

「言いわけ」の比較文化論 (一)

——序説(1)——

柏岡 富英

イントロダクション

アメリカには「マンデー・カー」という言葉があると聞いた。月曜日に作った自動車は故障が多いらしい。自動車工たちが、日曜日の遊びすぎや飲みすぎのために、月曜日にはまともな仕事ができないためだという。おそらくは、買ったばかりの新車の具合が悪くなつてくやしがつている友人をみて、運悪くマンデー・カーに当たってしまったのだから仕方がないではないかと笑います。一種のジョークなのだ。あんなクルマを買うのははじめから論外だ、と決めつけるのではなく、一般的にはいいクルマなのだから選択が間違っていたわけではないのだ、という心やさしいなぐさめなのである。

月曜日にいい仕事ができないのは何も自動車工に限ったことではないだろうし、アメリカだけに限ったことでもないのかもしれない。自動車に関する筆者の知識はきわめて限られているし、たとえば統計的にみて、月曜日に作られたアメリカの自動

車に欠陥が多いのかどうかを確かめたことはない(自動車は一日単位で作られるのだろうか?)。私が興味を引かれるのは、事の真偽ではなく、このジョークのもつ奇妙なリアリティー感である。こういう流言がささやかれ、それが少なくともジョークになり得る(「さもありなん」と思える)ためには、それ相應の社会的背景が存在していなければならない。

その背景とはどんなものであろうか。第一に、日曜日のアメリカ人(あるいはその一部)が、翌日の労働に影響がでるほど飲んだり騒いだりしてもある程度仕方がないという一種のあきらめである。これは日曜日がキリスト教にとっては安息日であることと矛盾するようだが、現在では労働が禁止される「聖なる日」というよりは、労働者の権利としてのウィークエンドという意識の方がはるかに強いだろう。実際、多くの州では日曜日の午前0時を期して酒類の販売は中止されるが、午後(教会から帰ってきたハズの時間)には販売が再開される。

第二に、このジョークの標的になっているのがホワイト・カラーではなく、自動車工というブルーカラー階層である点に注目しなければならない。日本でもアメリカでも、階層が下がれば下がるほど強い酒を大量に飲むというイメージがある。無論上層階級も飲むが、節度の範囲内、という規範は上に行くほど強いことになっている。

同じことはタバコについてもあてはまる。タバコを吸うのは教養のない労働者と相場がきまっています。愛煙家のインテリやプロフェッショナルは大変肩身の狭い思いをしている。大学のキャンパスには灰皿はほとんど見当たらない。あつたとしてもごく限られた場所、しかもあまりばつとしない場所である。面白いことに、禁煙の規範は女性に対しては比較的ゆるいらしい。空港のロビーなどでタバコをふかしているのは女性が多い。これは一般に、女性の方が意志力が弱いとされているためである。タバコを止められない男なんて駄目なヤツにきまっているが、女は意志力が弱いから仕方がない……という、大逆説的な性的階層意識が基盤にある。要するに現代のアメリカでは、二日酔いでタバコを吸いながら仕事に出て来るようでは、出世は望めないのである。

第三に、このジョークに出てくる仕事熱心でない工場労働者のイメージは、アメリカ経済の衰退に伴って、比較的新しく流布するようになったものだろう。いわば、優秀な日本の自動車と、それを支える勤勉な（勤勉すぎる）労働者との対比におい

て語られる、いささか自嘲的なジョークに違いないということである。逆に言うアメリカ人自身が、「働かない（一部の）アメリカ人」という自己イメージを受け入れはじめており、そのことが逆にアメリカ製自動車の質の悪さを説明する原理として使われている、とも考えられるのである。⁽²⁾

繰り返すが、以上にあげたジョークとその三つの背景は、「事実」のレビューで「アメ車」の欠陥性を説明しようとする試みではない。社会的通念として、アメリカ製の自動車は欠陥が多いということになっており、アメリカともあろうものが何故そんな情けないものを作るのかは……それが客観的な事実（実は、この「事実」という表現自体が本論にとって非常に大きな係争点であるのだが、ここでは深入りしない）であるか否かは別として……社会一般が「仕方がない」と納得するような形で説明されなければならないのである。もう少し抽象的なレベルでは、このジョークは（１）社会的状況（日曜日）と（２）社会階層あるいはサブ・カルチャー（自動車工）とを組み合わせることによって、（３）自明ではない社会現象（日米の技術力逆転）を、「仕方がないもの」として納得しようという試みと解することができるのである。

言いわけと動機

われわれは社会的な生活の中で頻繁に「仕方がない」とつぶやいたり大声で宣伝してまわったりするが、こういった言いわけ

は、ある行為あるいは行為の連鎖が自明と思われるときには発せられない。行為が自明であるというのは、社会的期待と行為とが一致しており、それ以外の可能性が、行為者自身にも状況に關与している他の人々にも考慮されない状況である。ところが過去・現在・未来を問わず、行為の選択になんらかの疑問が生じたとき（あるいは生じそうだという予想があるとき）に、特定の選択を納得のいく形で説明すること、すなわち言いわけが必要となるのである。⁽³⁾

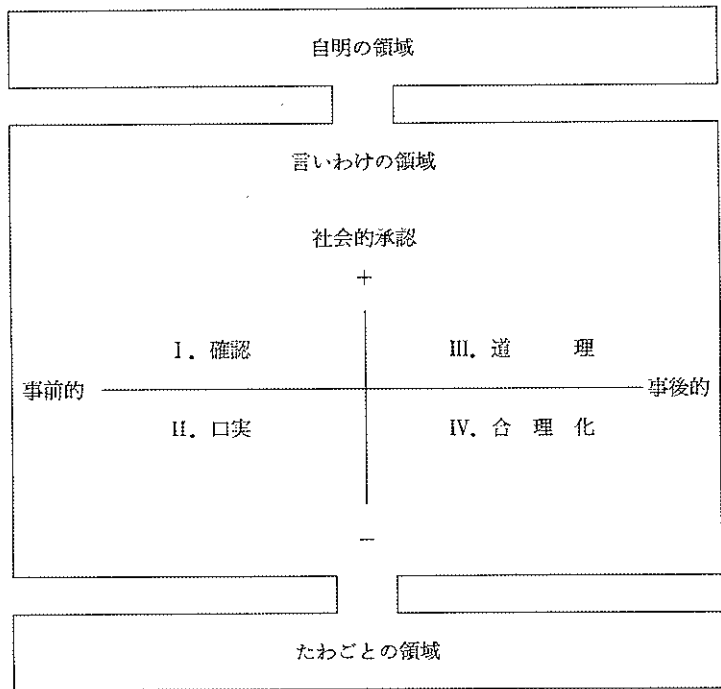
普通「言いわけ」は、失態のとりつくろいや「本当」の意図を隠べいするための副次的現象とされる。すなわち《動機↓行為↓言いわけ》という図式が一般的である。この場合、動機は社会に先だつて個人に内在する生物学的・心理学的エネルギー（たとえば本能や個性）であり、それと社会的期待（規範）とのギャップを埋めるものとしての言いわけが想定されているのである。内発的・個人的動機と社会的期待とは対立しているか、少なくとも発生源が違うので、社会生活が円満に営まれるためには両者の間になんらかの折り合いをつけねばならないのである。この立場からすると言いわけは、行為に先立つ内発的・個人的な動機（ホシネ）を隠べいして、外発的・社会的規範（タマエ）にそぐうように事後的に取り繕うメカニズムだということになる。

しかし言いわけは、何か都合の悪いことをしてしまったときの事後処理にとどまらない。日常生活は何かをする（しない）

ための言いわけで満ちあふれている。「日曜の午後」は飲むための、「接待ゴルフ」は日曜日を家族とともにすごさないための、「経済大国」は軍事的にも大国になるための、「男子」は厨房に入らないための、言いわけである。こういった言いわけが、どこか別のところにある動機を隠す仮面なのか、あるいはそれ自体が行為の「本当」の誘引なのかは、その言明がどれほどのリアリティー感ないし説得力を（本人と関与者に対して）もつかによって判断される。説得力が弱いときには、その言明は通常の意味での言いわけと解釈される。しかし十分に強いときには、言いわけはもはや言いわけではなく、動機そのものと解釈されるだろう。

後者の場合、言いわけは副次的な自己防御行為ではなく、むしろ、社会的期待との関連において、特定の状況の中で行為を発動したりあるいは思いとどまったりするメカニズムの一つだと考えることができる。すなわち、まず最初に社会的に蓄積された言いわけのストックがあり、それに触発されて行為がおこされる、という経路が浮かび上がってくる。上の図式にならえば《言いわけ↓動機↓行為》という経路が成立する。この場合、動機は必ずしも内発的ではないし、動機と社会的期待とが別物であるともとらえられない。また言いわけは必ずしも事後的に発動されるのではない。むしろ問題となるのは、言いわけがどれほどの（本人を含む）社会的承認を得ることができるか、ということである。

二つの極端なケースを考えてみよう。第一は、社会が予め用意している言いわけ（あるいは社会的期待）が「二次的本能」と呼んでも差し支えないほどに内面化された場合である。ここでは行為者自身にとっても状況関与者にとっても、動機と行為との連鎖があまりにも「当然」であるために、一般的な意味での言いわけが表面に浮かび上がる余地がない。しかしそれは、



言いわけが存在しないためではなく、言いわけが社会構成員の全体に内面化されて、疑問の余地がなくなってしまったために、日常的に意識されることがないだけの話である。これが、本節の冒頭にあげた自明的社会状況であり、言いわけ行為は発動されない。

ところが、第二に、ある社会的状況の下で当然とされる行為は、異なった条件の下では、直ちに言いわけをしなければならぬものとなる。社会的期待が同一ではないからである。これは一方では行為主体が異なった文化圏間を移動することによって生じ（たとえば、「場違い」な振舞いや外国を訪れたときのカルチャー・ショック）、他方では社会的期待の構造そのものが変動したり多様化することによって生じる（たとえば、時代錯誤や世代間ギャップ）。この場合、言いわけはほとんど言いわけでさえなく、「たわごと」と片づけられてしまうだろう。

言いわけの領域とタイプロジー

言いわけが社会的な意味をもつ領域は、この二つの両極端の間である。これまでの議論を整理すると、言いわけは、ある社会状況の下における行為が自明ではないとき、その行為が社会的に正当と認められる動機に基づいて行われた、あるいは行われようとしていることを状況関与者（本人を含む）に対してアピールする言明である。そこで、言いわけが（一）事前的になされるか、事後的になされるか、（二）社会的承認を与えられ

るか否か、の二つの軸を組み合わせることによって、言いわけを四つのタイプに分類することができる(前頁の図参照)。

第一のタイプは、これからしようとしている行為が社会的に正当な動機に基づいているというアピールが納得された場合、第二のタイプは納得されなかった場合である。いずれの場合にも、言いわけをする人は、行為と動機との整合性に何らかの程度の不安があり、言いわけという「さぐり」を入れるのである。

この「さぐり」は、必ずしも自分が相手を体よくごまかそうという試みとは限らない。それは、内発的動機論、あるいは動機と言いつけの二元説に基づく見方である。すでに論じたとおり、まず最初に言いわけがあり、それによって行為や欲望が誘発されるという経路は充分に可能なのである。いわば欲望そのものが言いわけによって喚起ないし創出されるのである。キャッチ・フレーズによる需要の創出(「花の金曜日」)や、諺による行為の規制(「急がば回れ」)、プロパガンダによる資源のチャンネル化(「国際人をめざせ」)などが、その例である。こういった言いわけは個人の内に取り込まれて、いわば「在庫化」される。この想定に基づけば「さぐり」の目的は、予定された行為に相応しい言いわけを模索するためではなく、在庫の中から特定の言いわけを選びだし、それを出発点として何らかの行為を起こしていいものかどうかを模索することにある。

いずれにせよ、言いわけと行為との整合性が納得されたとき、その言いわけは動機の正当性を再確認するためになされたと解

される(タイプI)だろうし、納得されなかったときには策略や口実と解される(タイプII)だろう。

第三と第四のタイプは、事後的になされる言いわけである。ここでも、行為と動機との整合性は自明ではない。行為者自身としては正当な動機に基づいた行為だと思いこんでいても、思わぬところから疑問を突きつけられてあわてることがよくある。また、動機の正当性に初めから自信がなく、他の人々がどう思っているかが気になって積極的に言いわけをすることもある。

事前的言いわけと同じように、事後的言いわけも、多くの場合は「さぐり」である。言いわけが首尾よく受け入れられたとき(タイプIII)には、それは道理と解され、本人自身もそう信じるようになる。むしろ、それが意図的な煙幕である場合、うまくいった、と安堵の胸をなでおろすこともあるだろう(ただし、後になって「本心」が暴露されない保証はない)。逆に納得が得られなかったとき(タイプIV)には、合理化という烙印がおされる。その場合でも、「今だから話すこの真実」という類の、二段落、三段落の言いわけを繰り出して、道理にたどりつくこともある。

言うまでもなく、言いわけの分類は固定的ではありえない。何度も繰り返すように、問題は特定の社会状況における行為と言いわけとの親和性である。言いわけのリアリティー感と言ってもいいだろう。つまり、言いわけがリアルであるかどうかは、行為状況と規範体系によって決まるのである。

本研究のプラン（言いわけ）

あらゆる社会の根底をなす「すべし・すべからず」の原理は、その成員にとってあまりにも当然であり、普段は意識にのぼらないほど自明なことがらであるために、直接的な調査の対象にはなりにくい。ところが上に論じてきたような意味での「言いわけ」には、人間行動に関する約束ごとの体系（「文化」）が、思わず顔をのぞかせている。本稿はそういった観点から、社会生活における「言いわけ」行為に注目し、いわば逆照射の手法を用いることによって日本をはじめとする諸文化の深層に切り込もうとする試みの序論である。次号からの『日本研究』誌上では、比較文化論の立場から、もう少し個別的な問題点に関して論考をすすめていきたいと考えている。あえて比較文化論と言うのは、国際摩擦と呼ばれる現象の多くが、互いの言いわけが納得されないために生じていると考えられるからである。さしあたって筆者の念頭にある論点は以下の通りである。

（一）比較的多くの「言いわけストック」が用意ないし許容されている社会と、そうでない社会とがある。一般的には、固定的・均質的な社会はストックが小さく、流動的・異質な社会ではストックが大きくと考えられる。あるいは話の順序は逆で、われわれはストックの大小をもって社会の固定性や均質性の度合いを測っているのかもしれない。伝統文化を理由に行為の選択肢を制限しようという試み（たとえば『日本文化論』）は、

この角度から再検討することが可能である。

（二）言いわけの正当性は「誰が言っているのか」によって大いに異なる。ある人には許される言いわけは、他の人には許されないかもしれない。「○○のくせに（分際で）」というのがこれにあたる。○○の部分は社会的地位……男、女、子供、若造、教師、医者など……である。この変形として、「彼ら」にあてはまるが「われわれ」はそうはいかない、という言いわけがある。アメリカ風と日本風、伝統風と現代風、田舎風と都会風、などといった対立図式がこれにあたる。

（三）自我の本源にまつわる観念の検討は、社会や下位社会を比較する上できわめて有用である。ラルフ・ターナーは「本當の自我」という論文で、現代のアメリカでは「制度的自我」から「衝動的自我」へと自我概念が移行してきた、と論じる⁽⁵⁾。前者においては社会的規律に習熟するにしがたって自我は完成されていくとされるが、後者では社会的規律に縛られる度合が少なければ少ないほど真実の自我に近づくとされる。人間が何の命ずるところに従って行動すべきかは科学の問題ではなく、ここまで論じてきた意味での言いわけの正当性の問題なのである。

（四）言いわけは「一般化された他者」の承認を得ることを目的としている以上、第一義的には体制維持的な機能をもつ。しかし、ある人にとっての「一般化された他者」が社会全体からみれば逸脱の下位文化や異端文化であるときには、その文化へのコンフォームズム自体が反体制的傾向をもつことになる。対

抗文化の支持者の行動は、主流文化の立場からは正当な言いわけをもたないことになるが、対抗文化の立場からは立派な言いわけ(≡動機)を認めることができるのである。「新人類」と「モーレンツ社員」との確執は、生活態度にまつわる二つの言いわけ体系の確執と読み変えることができる。社会変動の根元には言いわけ体系の変動や交代があるといっても言い過ぎではない。

次回以降、以上の諸問題を中心として、社会化論、準拠社会論、逸脱論などを検討しながら考察をすすめていく予定である。

参考文献

- (1) 社会的行為における「言いわけ」の重要性を考えるうえで、以下の文献から大きなヒントを得た。これらの文献をよく御存知の読者は、本稿のどこどこに直接的、間接的影響を認められるだろうが、その影響は広範多岐にわたるため、個別の脚注をつけるより、文献リストを冒頭にまとめて煩を避ける。
- Robert N. Bellah et al., *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*. Berkeley: University of California Press, 1985.
- Robert N. Bellah, "Civil Religion in America," in id., *The Broken Covenant: American Civil Religion in Time of Trial*. New York: Seabury, 1975.
- Peter L. Berger & Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. New York: Doubleday, 1986.
- Kenneth Burke, *On Symbols and Society*, ed. Joseph R. Gusfield. Chicago: The University of Chicago Press, 1989.
- Jack D. Douglas, *Understanding Everyday Life*. London: RKP, 1971.
- Hugh Dalziel Duncan, *Symbols and Social Theory*. New York: Oxford University Press, 1969.
- Hans H. Gerth & C. Wright Mills, *Character and Social Structure*. Harcourt, 1933. (中巻「開闢」『社会学の社会批判』、朝倉書店、一九七〇)
- Robert H. Lauer & Warren H. Handel, *Social Psychology: The Theory and Application of Symbolic Interactionism*. Boston: Houghton Mifflin, 1977.
- Robert K. Merton, "Social Structure and Anomie," in id., *Social Theory and Social Structure*. New York: The Free Press, 1986.
- Robert S. Lynd & Helen M. Lynd, *Middletown: A Study in Contemporary American Culture*. New York: Harcourt, 1959.
- C. Wright Mills, "Situated Actions and the Vocabularies of Motive," *American Sociological Review*, Vol. 5, No. 6, 1940.
- William G. Sumner, *Folkways: A Study of the Sociological*

以上のうち、ミルズの二つの著作からはとくに大きな影響を受けた。これらについては、井上俊氏に明快な解題があり、筆者自身も二つのエッセイを発表した。

井上俊、「動機の語彙」作田啓一、井上俊編、『命題コレクション 社会学』。筑摩書房、一九八八。

柏岡富英、「動機のボキャブラリー」(あるいは大義名分)について、『日文研』、一九九〇年第三号。

柏岡富英、「国際摩擦における『言いわけ』の構造——日本とアメリカの場合」、梅原猛編、『日本とは何なのか』。NHKブックス、一九九〇。

(2)

「予言の自己成就」という概念に関連づけて言えば、勤勉という自己イメージをもつ労働者はますます勤勉に働いて優秀な製品を作るだろうし、そうでないものは欠陥商品を作っても「仕方がない」のである。自己イメージがどういう過程で生成・変化するのかは、それ自体として考察せねばならない問題であるが、いったんできあがった自己イメージと、それに基づく社会的行為とが、少なくとも一定の期間、自己再生産の過程を繰り返すことは間違いないだろう。「マンデラー・カー」のジョークにはやるせない寂しさが漂っており、それだけに余計なおかしいのである。

多くの「日本人論」(あるいはその裏返しとしての「アメリカ人論」)が説くように、日本人労働者が「もともと」働

き者であり、アメリカ人労働者が「もともと」仕事熱心でなかったのではない。たとえば、二〇世紀初頭にアメリカのノース・カロライナ州で産業スパイとして暗躍していたある日本人は、規律正しいアメリカの労働者への賛辞をおしず、

逆に日本人労働者は決してアメリカ人のように技術に習熟したり仕事熱心になることはないだろう、と書いている(Margaret McKean, 『普遍理論の中の日本文化』、国際日本文化研究センター編『世界の中の日本』第三集所収、近刊)。

(3)

自らのアイデンティティを維持するうえで「重要な他者」に対して十分に説得的な「言いわけ」を提示できない場合、行為者は面目を失墜する(ウラオモテのある人物、または言行不一致と非難される)ことになるだろうし、アイデンティティを変更しようという意志のない限り、その行為(もっと正確に言うと、特定の行為と特定の「言いわけ」との組合せ)が繰り返される可能性は少ない。逆に、行為の内容が同じでも、「言いわけ」が首尾よく受け入れられるときには、その言明は「合理化」ではなく「合理的説明」と理解されるのであり、その場合には類似の社会的状況の中で当該行為が繰り返される可能性が高い。

(4)

しかし言いわけという言明は一つの行為であるから、言いわけをするかどうか自体についても正当な言いわけがなければならぬ。「不言実行」という規範が非常に強い場合には、他者に対しても自己に対しても言いわけがなされる可能性は低いであろうが、これは行為の選択肢がきわめて限られている状況でのみ有効な規範である。しかも、この規範は「男」

という下位カテゴリーに適用される。このような社会環境の下で言いわけをする男は、「言いわけがまし」く「女々しい」という評価を与えられる。逆に社会環境が複雑で、さまざまな価値が交錯している場合には、言いわけ行為の発動される可能性が高まるであろう。

- (5) Ralph H. Turner, "The Real Self: From Institution to Impulse," *American Journal of Sociology*, Vol. 81, No. 5, 1975.